教訓

白井の「山津波」

白井地区（伊久美）を襲った山津波は、16人もの尊い命を奪い去りました。自然に対する「自然の恵み」という感謝の気持ちから、「自然の脅威」という恐ろしさに意識を変えました。山津波で経験した自然の脅威から、災害とどう向き合うべきか考えてみましょう。

土砂の中の捜索活動の様子

土石流によって押し流された民家

山津波の被害

昭和35年8月13日、一週間ほど降り続いた雨は600ミリを超え、午後8時30分頃、白井地区で大規模な山崩れ（以後、「山津波」）が発生。崩れ落ちた土砂は、白井部落を襲い、直下にあった2件の民家を飲み込み、そこに暮らす家族と手伝いに来ていた若者、16人全員が生き埋めとなりました。また、この影響で伊久美川に流れ込む雨水が行き場を失くし、川に架かっていた伊久美地区の全ての橋が流出するなど、下流でも洪水の被害を拡大させました。

大雨でも自宅で待機

当時、白井公会堂が避難場所に指定されていましたが、大雨だからといって早めに避難する意識はありませんでした。もちろん土砂崩れを予期することもありません。我が家が一番安全という考えのもと、どこの家庭も自宅で静かに待機している状況でした。実際は、土砂に飲まれた民家は、白井部落で最も頑丈と言われていた家でした。

危険な山道

部落の人たちが、2件の民家が土砂に埋もれていることに気づいたのは翌朝。最初に発見したのは、土砂によって取り残された、部落でも最も奥に住んでいる家の住人でした。道が流されて下りて来られなかったため、逆に山の高台まで登り、大声で叫んだことで、部落全体に伝えることができたそうです。

その後、被害の状況を伝えるため、部落の二人が隣接する二俣部落まで、山伝いに急いで向かいました。

支援の手

通報を受けた消防団と警察、これに地域住民を含めた約200人が、生き埋めになった人の救助活動を行いました。

また、山津波の後も降り続く雨のため、部落の全員が山の高台に寝泊りすることになり、二俣・西向・大平・大森部落の人たちが、連日険しい山道を通って、炊き出しなどの支援に駆け付けました。日赤救護班の婦長も、負傷者を手当てするため、川を歩いて渡ってきました。

数日後、自衛隊などの救援部隊が駆け付けたことで、ようやく救助・救援物資・道路復旧などの活動が本格的に進み出したのです。

見えてきた教訓

山津波に関わった人たちは、自然の脅威を肌で感じ、多くのことを学びました。自然を甘くみないで「早めの避難」を心掛け、また災害の影響を受けない「連絡手段の確保」という教訓。そして、被災者を救う「地域の絆」への有難み。部落間の助け合いは、被害に遭った白井部落の人たちの避難生活と、心を支えました。行政の支援が行き届くまでは、自分たちの手で乗り切るしかありません。このためにも、地域内の結びつきを強めておくことが望まれます。

白井地区では、このような災害が二度と起きぬよう、また、尊い命が奪われぬよう、だれもが慰霊碑の前で手を合わせています。この経験を後世に伝えながら、これからも豊かな自然との共存を続けていきます。

犠牲者の慰霊碑（白井）

伊久美中学校　1年　男子生徒
～八月十三日 集中豪雨災害文集 より～

月の光にこうこうとてらしだされた白井部落。これが白井だろうか。上の方を見ると長井さんの家と兼田さんの家がかげもなくなっていた。ふしぎだまったくふしぎだ、あんな大きな家が二軒ともなくなってしまうなんて……

昭和36年2月8日発行

元市職員
天野（あまの） 千昭（ちあき） さん（相賀）

歩いて向かった現地調査

集中豪雨によって山津波が発生した直後は、電話の遮断や道路の寸断で、被害状況を把握できませんでした。そのため、当時、市の建設部に所属していた私を含む4人が、現地調査に向かいました。

橋は流され、川沿いの道も通れず、川口から荒れた川の中を歩きました。8月14日は当時の伊久美小学校で自炊して一夜を明かし、翌15日に白井地区と西向分校を調査したのです。我々の調査報告を受けて、自衛隊などに救援要請しました。

この経験から、早期の救助や復旧を実現するために、「確実な情報伝達の手段を持っている必要がある」と強く感じたことを今でも覚えています。

九死に一生を得た経験

当時25歳だった私は、伊久美川近くの茶工場でお茶揉みをしていました。山津波の発生後、ものすごい勢いで工場内に水が入ってきたので、急いで少し高い位置にある自宅へ逃げ帰りました。もし逃げ遅れていたら、私も工場と一緒に土砂の中に埋もれていたことでしょう。

山津波の直前、島田市青年団協議会の一員として、神奈川の台風や大代川の氾濫による災害の復旧活動に参加していました。その経験が、地元白井の復旧活動などに生かされました。

この災害をとおして得た教訓は、「総雨量600ミリにもなれば必ず何か起きるという警戒心を持つこと」、また「災害のときは、地域の助け合いがとても大切」ということです。

九死に一生を得た有難さ、そして犠牲となった尊い命に報いるため、私の最後の人生を防災に役立てて生きていきたいと思っています。

樋澤（といざわ） 哲夫（てつお） さん
（伊久美白井）